

東京キリスト教学園 ボランティアセンター活動報告vol.13



2015/4/
発行:ボランティアセンター

■いつもお祈り感謝いたします。

■二つのキャンプにTCU生が参加しました。

・ふくしまHOPEプロジェクトキャンプ

3月29日～31日に宮城県の栗原市国立花山少年自然の家にてふくしまHOPE主催のキャンプが行われました。TCUからは、豊島集司さん、上門豊明さん、木暮新さん、生亀俊輔さんの4名が参加し、福島の子どもたちと動物園に行ったり、凧作りやゲーム、スポーツなどを行い、子どもたちと共に楽しい時間を過ごしました。

◆証:生亀俊輔さん

私は被災地ボランティアということで三月の終わりに三日間、福島HOPEプロジェクトが開催する福島HOPEキャンプに参加してきました。被災地にまだ残る爪痕である放射能汚染、それを気にして外で満足に遊べない子供たちとその保護者の方々を連れて、宮城県の地でのびのびと遊ばせようという目的の下、子供たちと様々な遊びをしてきました。動物園、自然の家での凧の工作や自由時間の中での遊戯、子供たちを自由に無邪気に遊んでいる様子を見て、とても良い時を参加者全員で形成できたと実感します。また、同時に奉仕者としての働きの中での経験が自分に成長を促すものであったことも実感しました。今回は特に二つの「責任」という言葉に集約できます。

まず一つ目は個人的な責任で、私はキャンプに参加すること事態が久々にまた奉仕者としての参加は初めての経験でした。子供たちと触れあうなかで、不意に自分が子供の頃に大人のひとと遊ぶ情景を思い出すことがあったのですが、しかし今となっては立場が逆、私が大人側で、子供を遊ばせる側なのだということを自覚しました。もう子供ではなく、それらを守る立場となる「大人である責任」の一端を自覚しました。

もう一つの方は被災地ボランティアのそのものの意味を教えられました。今回のキャンプは先に書いたように放射能汚染を心配する方々のために行われるものでした。しかし震災から五年が経った今、震災に関連するメディアの報道も少なくなり、放射能すらも自分に関係が無いものとして思う人、また忘れている人は少なくないでしょう。私もどちらかと言えば他人事のように感じてしまっている面があり、今回の参加も自己の経験として個人的な目的で参加したものでした。しかし、被災地の方々は今も被災の最中にあることを思い知らされました。一見明るい様子の子供たちとその保護者さん、ですが福島HOPEスタッフと保護者さんの中で行われた茶話会のなかではそれを意識するような場面が見られたと聞きました。その話題に触れることを躊躇うような姿勢や、放射能による色々な問題に悩まされているということも聞きました。現在も被災者である方々のその様子を聞いて、他人事と感じるものが現実味を帯びてきて、今までの震災に対する意識を再確認し、苦しんでいる人はリアルタイムで苦しみの中に生き、またそれを知らずその人たちのために何も考えない自分を見て変革の必要を覚え、被災後の日本に生きる一人として忘れない、またどうすべきか「考える責任」を自

覚しました。

今回のキャンプは自身の経験とともにまた意識を変えさせられるものでした。この二つの大きな責任の自覚、それは今後の自分に問うているものなのだと感じます。今回の経験と自覚を促したキャンプ、また参加者一同に感謝をしつつ今後の歩みの糧として覚えていきたいとおもいます。

・東仙台ボランティアキャンプ

3月30～4月2日に宮城県仙台市にて、東仙台ボランティアキャンプが行われました。TCUから、前田菜々さん、吉橋雄介さん、長谷部将希さんの3名が参加しました。このキャンプには毎年TCUの学生がスタッフとして参加しています。

◆証:吉橋雄介さん

三月三十日(月)から四月二日(木)まで小学生を対象とした東仙台ボランティアキャンプにスタッフとして参加してきました。今回で東仙台ボランティアキャンプに参加するのは三度目です。三度目という事もあり、キャンプに来る子供たちも僕のことを覚えていてくれたのが嬉しかったです。奉仕内容は、キャンプのスタッフとして小学生の子供たちと一緒に遊んだり、子供たちと関わることです。このキャンプは、被災地の子供たちを対象にしているため、教会に行ったことがない子供たちも来ます。しかし、プログラムの中では、みんなで賛美を歌ったり、一緒にお祈りをしたりということもします。キャンプ中は、体育館でスポーツ大会をしたり、プラネタリウムに行ったり、スキットをしたり、とても賑やかで楽しいプログラムが盛りだくさんでした。また、子供たちが大声で賛美を歌い、プログラム一つ一つを純粋に楽しんでいる姿には、毎回感動させられます。一見、他の子供たちと何も変わらないただの小学生。しかし、あの悲劇を経験してしまった子供たち。その悲劇の傷はいまだに残っていると思うし、それを癒すことができるのは、神様だけ。けれど、その傷のために祈り、励ましてあげることができる。子供たちと数日間一緒に過ごす中で、これからも彼らと関わり続けたいと強く思われたキャンプでした。彼らがこれからどのように成長していくかが、とても楽しみです。東日本大震災から四年経った今、被災地ボランティアとは何なのか、何が必要とされているのか、何ができるのか、これらのことを考えつつ、これからもボランティア活動に関わっていきたく強く思います。



(↑ふくしまキャンプの様子)



(↑東仙台キャンプの様子)